高知県立坂本龍馬記念館だより　2007（平成19）年10月　第63号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛鳥

ひとう

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/

龍馬を見抜いていた男「樋口真吉」展 いよいよ開催！

10月1日(月)～12月16日(日)

慶応三年（一八六七）の龍馬暗殺から百四十年。その十一月十五日がまもなくやってくる。

百四十年前の今頃、龍馬も仲間とともに新しい日本をつくるため日夜奔走していたが、その身辺には絶えず命を脅かす黒い影がつきまとっていた。

「今いる近江屋が危ないことは分かっている。安全な隠れ家を探すよう樋口真吉に伝えて欲しい」。こんなにも切羽詰まった手紙を龍馬は土佐の同志・望月清平に送っていた。暗殺一ヶ月前のことだ。

しかし、この伝言は真吉に届かなかった。真吉が知れば必ず動きがあったはずだが、龍馬は近江屋から棲み家を移すことなく襲われた。

ところで、この樋口真吉という男をあなたは知っていますか？

そう尋ねても、多くの方が知らないとおっしゃるはず。そのはず。樋口真吉は龍馬が最後に命を託す依頼をした人物であるにもかかわらず、歴史の表面に出ることなく世を去っているからだ。

しかし、真吉が龍馬に与えた影響は量りしれない。メモ魔とも思えるくらいの日記類を残しているおかげで、そういった龍馬との関係を読み取ることができる。そのことによって龍馬の新たな側面も見えてきた。

樋口真吉

また、今回の開催をきっかけに静岡・下田市では活発な龍馬研究が始まっており、龍馬が行った場所、伊豆下田の町が面白く動き出したといえる。そして、あの時代、山野を縫い、海の波涛を眺めながら龍馬が出かけた町、四万十市と記念館のつながりも深まってきた。

時代を走り抜けた男たち、真吉と龍馬。親子ほど年の違う二人は深い信頼関係で結ばれ、真吉は龍馬を見守り続けた。脱藩前からの龍馬を見抜いていた男・樋口真吉を通じて、新しい龍馬をご覧いただければ幸いです。

前田　由紀枝

「坂竜飛騰」の文字＝龍馬脱藩前に「坂竜飛騰（龍馬は飛び上がった）」と真吉は記した。この機関誌のタイトルでもある。

三館合同企画

暗殺一四〇年！
―時代が求めた〝命〟か―
「坂本龍馬・中岡慎太郎展」を振り返って

【三館合同展の成果・更に連携強化を】

今年の七月二十八日（土）～八月二十八日（火）まで、およそ一ヶ月間、「坂本龍馬・中岡慎太郎展」を開催した。

三館合同展は初めての試みで、その最大のねらいは、当館や中岡慎太郎館では展示ができない国の重要文化財や、宮内庁所蔵の貴重な資料を県立歴史民俗資料館へ展示し、県民の皆様にご覧いただくことにあった。

期間中の三館の観覧者数は、合計で約三万千五百人。

当館の観覧者数は、昨年同時期より五百人ほど減少したが、統計を分析してみると、興味深い結果が見えてきた。昨年のこの時期は、当館を訪れた高知県民の数が約千人だったのに対して、今年はその二倍以上の約二千百人となった。それでも総数が約五百人減ってしまった原因は、県外からの観光客の減少が挙げられる。昨年はNHK大河ドラマ「功名が辻」の効果で、高知県を訪れる観光客が非常に多かった。今年はその反動が表れ、観光客が減少したと考えられる。

三館合同展の宣伝は、主に高知県内を対象に行ってきたので、県内の方が増えたということは、宣伝の効果があったということになる。

ただ、県外組の減少が、龍馬ファンの減少というわけではないだけに、今後、県外へのPR方法に課題を残した。

【イベント報告・盛況のバスツアー】

当館はバスツアーや講演会などの関連イベントも担当した。

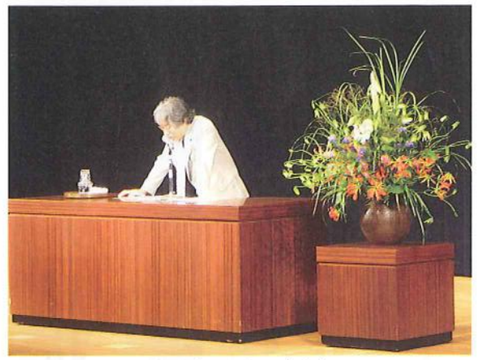
まず、バスツアーは八月四日・十八日・二十五日の三回開催した。先の二回は高知市内出発で、募集を開始してすぐに定員に達したため、急遽二台目のバスを手配したほどの盛況ぶりであった。

二十五日に開催したツアーは、安芸市を出発地点にして行った。これは、慎太郎を普段身近に感じている北川村や室戸市周辺の方々に参加していただきたいとの思いから企画したものでこちらの思惑通り、高知県東部から多くの参加者があり、こちらも充実したツアーとなった。

また、三回のバスツアーの昼食は、すべて当館隣の桂浜荘でとった。バスツアーのために、特別な幕の内を用意して、参加者からは大好評であった。

講演会は、八月十一日（土）佛教大学教授の青山忠正先生を講師に招いて行った。テーマは「慶応期の政局と龍馬・慎太郎―薩長連携を中心に―」。最新の幕末史研究の成果を交えた講演で、大変勉強になる内容であった。よさこい祭りの真っ最中にも関わらず、二百二十八人が聴講した。

8月4日バスツアー



青山忠正先生のご講演

【今後の展望・課題も見える】

三館合同展の出発点は、二〇〇一年に開催した山内一豊入国四〇〇年記念として行われた十館連携展だった。高知県内の博物館十館が、県立・市町村立の枠や、歴史・美術・文学という分野の枠も飛び越えて、連携したこの展覧会をきっかけに、高知県内にミュージアムネットワークが誕生した。

高知県内の博物館は、当館や慎太郎館を含め、小規模な博物館が多く点在している。こうした小規模館が充実した運営を行っていく上で重要なのは、ネットワークである。その目的とするところは、情報の共有化や職員の知識、技術の向上。通常は研修会などを通じて〝腕〟を磨くわけだが、今回は、三館合同展という実戦の中で学べたことは有意義であった。特に県立歴史民俗資料館の方々には、多々ご迷惑をお掛けしたが、当館と慎太郎館にとっては、大変勉強になった展覧会であった。

今回の経験や反省点を活かして、今後は県内だけではなく、県外の博物館とも連携して、充実した展示を行っていきたいと考えている。

三浦　夏樹

龍馬の神髄「海援隊約規」など寄託へ

前号でご紹介した弘松家寄託資料の中に、新たに「海援隊約規」、乙女、権平宛の手紙など龍馬真筆書簡等が加わった。これらは龍馬資料の中でも第一級のもの。

寄託者の弘松百合さん＝札幌市在住＝は、「龍馬記念館で高知県のために有効活用してください。多くの方にご覧いただきたいものです」とおっしゃっている。

また、その他にも整理中の同家資料があり、寄託対象となっている。龍馬のご子孫である弘松家からのご好意を受けて、館として保管展示に努めていくつもりである。

〈資料について〉

海援隊約規（慶応三年四月ごろ）＝海援隊の規則書。亀山社中でも同じような理念を持っていたと思われるが、海援隊に改組されて初めて明文化された。脱藩者であること、海外への志がある者が隊士の資格。当時の日本では考えられないこの自由な発想こそが龍馬の原点であり、龍馬の神髄である◆乙女宛書簡（文久三年秋ごろ）＝この年の七月に起きた大和天誅組の挙兵と敗走についての思い◆権平宛書簡（慶応三年六月二十四日）＝西郷を通じて兄・権平からもらった吉行の刀やいろは丸事件後のこと。この三点の書簡類は一つの巻子に収められている。

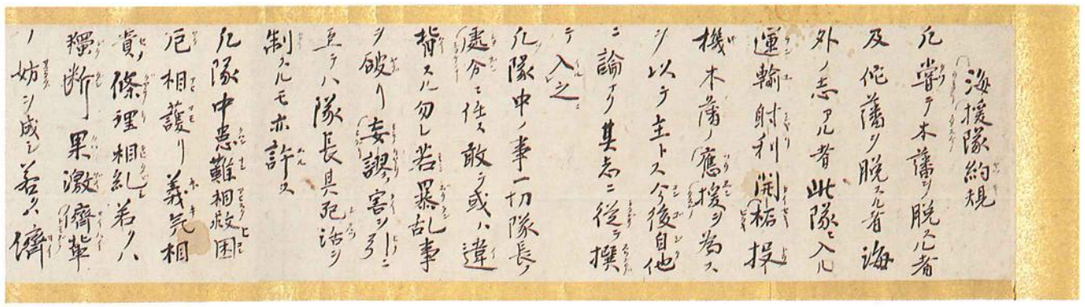
◆慶応二年十二月四日に権平及び一同宛に書かれた手紙等の写本＝この原本は分からなくなっている。澄心斎という人物によって写されたもので、この年の一月に伏見・寺田屋で襲われたときの様子や、ワイルウエフ号事件の慰霊碑建立、馬関戦争のことなどこの年の報告をしている。

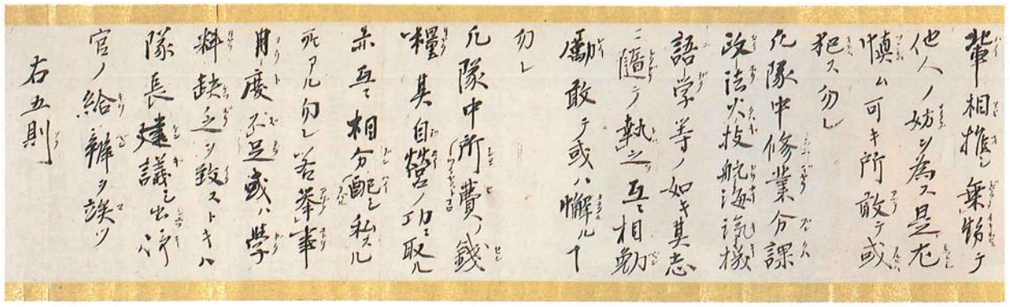
弘松家伝わるこれら貴重な資料をもとに、来年度には特別企画『約規物語』（仮称）を開催する予定である。

また、坂本家ゆかりの「和霊神社」（高知市神田）からは、坂本家が奉納した宝刀が寄託された。

宝暦十二年（一七六二）に建立された同神社に納められたこの刀は、南北朝時代に作られ、慶長年間（一六〇〇年前後）の銘が刻まれている。保管していた同神社氏子代表の佐竹敏彦さんは「脱藩の時に和霊神社に立ち寄った龍馬もこの刀を見たかもしれない。記念館で多くの人に見てもらいたい」とおっしゃっている。

前田　由紀枝





『海援隊約規』

ついに指定管理者の公募始まる！ 新たなるスタートラインに

今年の六月下旬に、高知県は龍馬記念館の管理・運営者を公募することを決定した。

現在も指定管理者制度は導入されているが、昨年度から平成二十年度までの三年間は、公募を行わず、県が出資した財団法人高知県文化財団への直接指定となっている。高知県文化財団が管理・運営する施設は他にも県立美術館や県立歴史民俗資料館、県立文学館、県民文化ホールがある。しかし、当館だけが、二十一年度から五年間の年限で公募されることになった。

昨年度から指定管理者制度が導入されたことによって、県が昨年の事業評価を行っているが、当館は最高のA評価を受けた。それがなぜ公募に出されるのか、理解に苦しむところである。事業評価が悪いため、公募を行い民間の智恵を借りるというのなら理解できるが。

そもそも、この指定管理者制度自体が博物館のような施設には不向きな制度だという声も現実におきている。博物館には多くの資料があり、適切な管理が求められる。資料の中には預かって管理している資料（寄託資料）もある。寄託者は、管理・運営者が代われば資料を引き上げるという方も少なくない。

寄託者は、博物館の過去の管理・運営状況を見た上で、信用して預けてくれる。さらに公が管理する施設ならば、なおさら安心して任せられるという気持ちがある。

ただ、公が管理する博物館といえども、信用や信頼は一朝一夕に築き上げられるものではない。管理者が代われば、それまで積み重ねてきた信用や信頼は、ゼロになると言っても過言ではない。寄託資料を引き上げたくなるのは、当然のことであろう。

先日、応募を考えている団体に対する現場説明会が開かれた。十四団体が集まった。高知県文化財団も公募に名乗りを上げ、全力で指定を勝ち取りに行く。しかし、勝ち取った後、問題が全くないといえばウソになるだろう。

県が管理・運営者に要求するハードルは非常に厳しいものがあるからだ。例えば、年間四本程度の企画展を実施する。年間十三万人以上の入館者を確保する。これだけでも並大抵の努力では不可能だと思う。そのハードルに館は敢て挑戦する。現在年間十二万人前後の入館者数を維持しているが、あと一万人増やしてそれを維持する。目標突破に向かって、館は今、スタートに立った思いである。

今後、正式な応募が十月九日から十一日に受け付けられ、十一月下旬に審査が行われる。そして、来年三月下旬には管理者が決定する。二十一年度からも引き続き高知県文化財団が管理者となれるかは、あと二ヶ月が勝負だ！。

三浦　夏樹

坂本龍馬記念館外観

12月17日（月）～3月20日（木）

「幕末写真館」展

「動きなよ、ぶれるき！ 龍馬が切り撮る幕末の一瞬 そこに時代の声を聴く」

このキャッチコピーで十二月十七日（月）から約三ヶ月「幕末写真館展」を開催する。今回の企画展では二階の全フロアーを、大きな写真館として幕末の雰囲気作りを計画している。

ペリーの黒船と伴に運ばれてきた新時代への追い風は、戊辰戦争を経て明治維新を迎えるわずか十五年の間に、風の吹き溜まりの如くいくつかの事件を引き起こした。カメラは、その事件に焦点を合わせる。

事件周辺の人々の表情も、現場の風景、人々の生活ぶりも被写体となる。人物の中に龍馬がいる。ひときわ異彩を放っている。時代の最先端を走る龍馬。カメラはその足跡を追う。いや、時にカメラそのものが龍馬に、龍馬がカメラになってしまう錯覚を覚えるはずだ。会場のあちこちに、時代を動かした人物が土佐和紙に映し出されて登場する。等身大である。龍馬も、慎太郎も、勝海舟、桂小五郎、高杉晋作…どこかで見慣れた人たちの表情から、新しい時代を創る〝時代のエネルギー〟を感じて欲しい。

混迷を極める現代だからこその企画である。

来館者の皆様、是非一度カメラを覗く気分で、龍馬の写真館へいらしてください。龍馬と共にシャッターチャンス。ここは幕末写真館です。

中村　昌代

幕末と写真（1）

写真の伝来

徳島大学名誉教授　渋谷　雅之

幕末から明治初期にかけて日本の写真師たちによって写された古写真が何枚現存するのかは想像も出来ない。土佐山内家宝物資料館に未整理で所蔵されているものだけでも一万枚といわれている。多くの古写真が書物に紹介され、写真の歴史が詳しく解説されているのは、それらが日本の開国と文明開化の軌跡をリアルに語る史料であるからに他ならない。

歴史上最初の写真は、仏人ニエプスによって一八二二年（文政五）頃発明されたが、撮影に約八時間を要し、景色を写すのがやっとというものだった。それから十五年後にはダゲールにより銀板写真（ダゲレオタイプ）が開発され、実用の時代に入る。

安政元年に下田に渡来した黒船に従軍写真師として乗り組んでいたE・ブラウン・ジュニアは、この銀板機を使って日本各地で四百～五百枚の写真を撮影したと言われ、そのうち数枚が現存する。銀板写真は、複製（焼き増し）が出来ない方式だったほか、左右逆に写るという欠点があった。そのため、当時の武士達は刀の差し方や、着物の前あわせを逆にして写真を撮った。

初めて写真術を見た日本人の衝撃は多くの記録として伝えられており、当時土佐藩の御馬廻だった大庭毅平が下田に派遣された折りの報告書にもその記録がある。一方、佐久間象山はこのときすでに銀板写真の知識を持っていて、ブラウン達を驚かせたという。

これより六年前の嘉永元年、長崎に輸入された銀板写真機を上野俊之丞が薩摩藩に納入して、島津斉彬の写真が撮られ、日本人による最古の銀板写真が残されることになる。上野家は代々御用時計師であり、先祖には絵師が多かったことから、技術と芸術の融合とも言うべき写真術の草分けとなる必然性があった。

俊之丞の子・上野彦馬は早くから舎密学（化学）を志し、その知識を背景に湿板写真の実用化に取り組む。彦馬は必要な薬品をすべて自製した。アンモニアは一頭分の牛骨を土に埋め、腐りはじめたころ掘り出して釜に入れ蒸留して作った。他に青酸カリ、硫酸、エタノールなどを作った苦闘の過程は、多くの書物に紹介されている。当時彦馬邸に寄寓して化学を学んでいた阿波藩の長井長義は、その後ベルリンに留学し、日本の薬学の開祖となる。彦馬の教えは、実験第一主義として、現代まで化学・薬学の分野で我が国の伝統となっている。

上野彦馬は文久二年、写真館を開き、日本初のプロ写真師となる。同じ頃横浜では下岡蓮杖が写真館を開いた。彦馬が化学を基礎として技術を開拓したのに対し、蓮杖は元々絵師であり、その基盤は芸術である。二人の巨人によって化学と芸術が結びつくのだが、化学を専門とする筆者の経験からしても、化学と芸術は切っても切れない関係にあることを感ずることは度々あった。

ブラウンの下田における遊女の銀板写真撮影（絵師不詳）＝下田開国博物館所蔵

拝啓 龍馬殿

6月21日～9月20日

154通

念願の龍馬記念館に来訪です。貴方がこの世を去ってからの日本は、各時代毎に様々な問題を抱えてはいますが、人間は生まれながらにして自由である権利は、貴方が生きた騒乱期を経ずしては獲得できなかったように思います。おかげ様にて、今の世は経済的ゆとりが生まれ、おのおのがやりたいことはやれる、夢の実現に向けて労を費やすことができるという、選択の自由が無限の世界です。故に若者は目的を見失いがちです。だからこそ自分自身を根本から見つめ直して、貴方のように自分の信念の糸が少しずつでも太い網となるように精進したいと思います。その信じる強さが心地よく、ありがとう！また来ます。

（6月29日　東京都　H・J　30歳　女性）

59年前に桂浜に住んでいました（桂浜生まれです）。久しぶりに桂浜の波の音を聞き、漁師だった祖父・父のことを思い出しました。毎日海を見て育ち、主人の転勤であっちこっち、また高知へ帰って来ました。あたらめて坂本龍馬の偉大さにゆっくり静かに感動しました。またちょこちょこと遊びに来ますのでよろしく！

（7月7日　高知市　E・O　59歳　女性）

3度目の土佐訪問にてやっと訪ねることができました。初めて読んだ本が龍馬殿の伝記で、私の生涯の目指すべき人となりました。あなたの人格、行動力、すべてがまぶしく見えます。あなたの様には生きれないと思いますが、自分なりに今を精一杯やっていこうと思います。追伸・誰にやられましたか？カタキはとれませんが知りたいです。

（7月10日　島根県　S・F　25歳　男性）

6年前位にも一度ここに来ました。その時はよく分からず来ましたが、2年前にマンガを読んでけっこう龍馬のことが分かって、歴史上の人物で一番好きになりました。龍馬の生涯はいつ見ても波乱万丈ですね（笑）。本当に世の中の人が必要としている人はすぐに逝ってしまうんだな…と思いました。ちなみにうちが一番好きな字は「龍」です！

（7月30日　兵庫県　S・H　16歳　女性）

私は坂本龍馬さんの行き方、ものの考え方、人とのかかわり方がとても好きで、自分も自由人をめざして生きていくつもりです。もし同じ時代に生があったとしたらゆっくりと話をしたいと思います。自分はげこなためお茶での接待ですが、申し訳ありません。

（8月1日　大阪府　Y・N　36歳　男性）

今のせいじはぐちゃぐちゃです。りょうま先生、早く起きて今のせいじに光をよろしくお願いいたします。

（8月2日　大阪府　D・K　10歳　男子）

FROM 1867 RYOMA

平成十九年度第一回龍馬記念館運営協議会を開催

九月十一日に運営協議会を開催した。昨年度の「宮地佐一郎」展から「坂本直行」展まで一定の評価ができたこと、また今年度の状況報告などをした。

特に今回は「指定管理者制度への対応」という現下の課題について、各委員からの意見が白熱した。

「記念館が公募されたということは、高知県の文化振興策、つまり文化行政のあり方を問われる問題。観光の人柱であるような今回の公募は合点が行かない。高知県の文化度が評価されているようなものだ。公立であればこその信頼はどうなるのか。」「昨年度実績にしても職員努力あってのことだ。」「記念館建設に向けて行動した千三百人という若者たち、共感した多くの想いはどうなるのか。もしも記念館が県から民間に渡るとしたら、彼らの魂を売ることと同じだ。」「歴史や歴史研究というものは身近にすぐ結びつかなくても長い目で見ていかなくてはいけない。」など、活発な論議となった。

■本年度委員の皆さん（昨年度から継続＝二年任期）敬称略

委員長＝片岡雅文◇副委員長＝谷智子◇委員＝廣谷喜十郎、橋本邦健、刈谷卓弥、青木淳

ここは館長の部屋

森　健志郎

桂浜の龍馬の銅像の前に立った司馬遼太郎さんがこう言っている。「ここはあなたに一番、お似合いの場所だ」。人でも、物でもその場所、空間にぴたり収まると、サマになる。背景にドラマが見える。それが感動につながる。先日、そんな感動を味わった。坂本家九代当主、坂本昇さんがお見えになり、最近館の二階に設置した「近江屋」のセットに上がった時である。坂本さんはカメラを向いて笑っておられた。その一瞬、時計が止まったような不思議な感覚に捕らわれた。すっと、別の風が吹き抜けたと頬に感じた。後で同行のY氏に電話で聞いてみた。すると「私も」。龍馬が来た？そういえばお彼岸であった。

私はいろいろなことでかつやくした龍馬がだれに殺されたのか知りたいです。今、学校の夏休みの自由研究で坂本龍馬を調べているのでいっぱい知りたいです。

（8月5日　徳島県　S・M　11歳　女子）

はるばるやって来ました。20数年前は桂浜だけ見て帰り、夕食時に仲居さんから「龍馬さんに会ってきましたか」と言われ、とてつもない大失敗を犯したことに気付き、いつかいつかと思っているうちに定年になった今年やっと会うことができ大感激です。しかしその間、司馬先生の本を読みながら思いは馳せていましたので！

（8月8日　広島県　T・M　60歳　男性）

夏休みの自由研究のねたにしようと思って神戸の北区のはしのほうからここまでやってきました。きてよかったと思っています。ここにきてりょうまの暗殺というものが一番に目にはいりました。自由研究にのるのでお楽しみに！

（8月8日　兵庫県　F・Y　10歳　女子）

大阪からやって来ました。長年、龍馬さんの故郷である土佐へ行ってみたいと思っていましたが、学生最後の年にその望みがやっと叶いました。私も自分にできる方法で世の中の悪い、というかもっと良くできるだろう部分を命をかけて変えるよう努力するつもりです。そのためにはもっともっと大人にならなければならないのですが、龍馬さんの生き様を見習って少しずつ目標に近づいていきたいです！

（8月10日　大阪府　T・J　大学生　男性）

高知のほこり、坂本りょうまについていろいろべんきょうしてます。

（8月13日　南国市　H・H　10歳　女子）

僕の父はあなたのことが好きで、今回この龍馬記念館に来たのも父の一言からでした。僕は今日初めてあなたの生き様を知り、あなたのことを今までとは違う目で今見ています。これからもカッコイイ坂本龍馬でいてください。

（8月15日　兵庫県　G・W　13歳　男子）

私は社会が苦手で歴史上の人物があまり分かりません。でも龍馬記念館へ来て、龍馬のことがよく分かるようになりました。部活が体操部なので勉強する時間もまずありません。だけど今日のことがきっかけになってこれからに生かしていこうと思いました。龍馬、私に社会の楽しさを教えてくれてありがとうございました。

（8月15日　香川県　S・Y　13歳　女子）

龍馬さん、ついに念願の高知桂浜まで来ることができ大変感激しています。果てしなく続く太平洋と、他では決して見ることができない桂浜の景色を目の当たりにして、さすが龍馬さんが育ったところだなと思い、少しうらやましくもなります。司馬先生の〝竜馬がゆく〟を読んで早10年ですが、気付けば龍馬さんが活躍された頃と同じ年代になりました。龍馬さんに負けないようにがんばります。

（8月17日　大阪府　T・K　29歳　男性）

＊＊＊ 編集者より ＊＊＊

今回は「！（ビックリマーク）」が入った勢いの感じられるメッセージが多く寄せられました。内容も、少し前までは「龍馬さん、もう一度日本を洗濯してください」と龍馬を頼るものが多かったのですが、最近では「龍馬を見習って頑張ります！」という人が増えてきて、いよいよ“平成の龍馬”が登場しそうな予感です。夏休みの入館者数は平年通りでしたが、連日の暑さも手伝ってか、忙しさは昨年の倍にも感じられ、職員みんな、龍馬Tシャツを着て汗をかきながら頑張りました!!

近江屋実物模型。歴史が動いた部屋を再現！

再現された「近江屋8畳間」

館の二階に、近江屋の龍馬、慎太郎遭難現場が再現された。屋根の勾配の関係で、少し天井が高くなっているが、その外は原寸に近い。床の間、ふすま、障子戸など雰囲気に満ちている。二階に上がって海方向に目線を移すと、その先にこの近江屋の八畳間が飛び込んでくる。館ではここを第三の展示室として使うことにした。

「暗殺者は誰か？」。先の龍馬・慎太郎展で、入館者の皆さんが大いに興味を寄せた龍馬を巡る謎の一つである。暗殺者についてはいろいろな説がある。幕府説、薩摩説、紀州説、土佐藩説…それぞれにもっともらしい理由がついている。しかし、断定されるものは無い。犯人推理用のパネルを置いた展示ケースは、手と額の脂で曇るため毎日拭くのに往生したものである。龍馬ファンの執着のしようがうかがえるし、謎の深さがまた、龍馬たるゆえんでもある。

そこで〝近江屋〟ではこの八畳間を展示室としてばかりでなくちょっとした講義室にも使ったり、時には〝舞台〟としても活用したいと考えている。

慶応三年（一八六七）十一月十五日、午後十時ごろ、この八畳間には龍馬と慎太郎が居た。二人は火鉢を囲んで〝議論〟していた。大政奉還が成り三日目、幕府との平和的解決を言う龍馬、「いや、それは手ぬるい！」と武力倒幕を主張する慎太郎。白熱していた議論を一瞬のうちに謎の暗殺者が斬った。それは同時に歴史の歯車をつなぐロープを切断した結果となった。まるで、地球の全てを支配する者の存在さえをも暗示させる様な瞬間ではないか。

歴史を体感できる八畳間になった。

夏・千客万来

◇江守徹さん（俳優・演出家）

三年後に公演予定のミュージカルオペラ『龍馬』（脚本・ジェームズ三木）の演出家として、江守徹さんが来館された。資料を熱心にご覧になった後、龍馬に寄せる思いなど静かに、しかし熱く語ってくれた。「龍馬がテーマだとワクワクしますね」。「まだまだ勉強しなくては…」と言うが、すでに独自の歴史観と人物観で龍馬のイメージを膨らませているようだった。楽しみである。

ちなみに、ジェームス三木さん脚本・演出のミュージカル『龍馬！』も来春から約一年間、愛媛県東温市の「坊ちゃん劇場」で上演される。

◇市川染五郎さん（歌舞伎俳優）

龍馬没後百四十年。歌舞伎（東京銀座・歌舞伎座、九月二～二十六日公演）に龍馬が登場。その主役、市川染五郎さんが来館された。

三年前の正月長時間ドラマ『竜馬が行く』で龍馬を演じた染五郎さん。「高知は故郷のような所です。かつて龍馬がいた高知に来てこの海を見ると、懐かしさと同時に龍馬という人が直に伝わってくる気がします。」と言う。立ち姿の美しさだけでない、龍馬の精髄を体得した役者だと思った。

今回は『竜馬がゆく』（原作・司馬遼太郎）立志編。脱藩後、勝海舟と出会い弟子入りしたところまでを上演した。続編の公演開催が大いに期待される。

他にも照英さん（俳優）がテレビ番組取材で来られたり、矢崎総業の国内サマーキャンプの小学生たち（二七〇名）、記念館主催の「流木でつくる工作教室」など、さまざまな場面で実に多くの方が来られた。先客万来。熱い夏だった。

前田　由紀枝

オカリナと月琴の夕べ

一月に開催した「オカリナと月琴コンサート」が好評だったため、九月十五日にリクエスト開催した。オカリナ奏者・本谷美加子さんと、今回はリュート奏者・永田斉子さんによるコンサート。

リュートと月琴のルーツは同じで、長崎出身の永田さんによる演奏は、双方の楽器を深く理解している演奏家ならではの味わい深いものであった。百六十名の参加者はアンコールの後も盛んな拍手を送っていた。

入館状況

2007年9月20日現在（開館以来5,775日）

◆総入館者数		2,070,631人
◆2007年度最多入館	5月4日	2,707人
2007年度最少入館	4月26日	72人
2007年度1日平均入館者数		434人
◇最多入館	1993.5.3	3,700人
◇最少入館	2004.10.20（台風のため）	8人

編集後記

えっ　と気が付けばもう秋。夏が「暗殺140年―坂本龍馬・中岡慎太郎」展と共に駆け抜けた。後に「樋口真吉展」。年末からは「幕末写真館展」、更に来年へと続く。

忘れてはならん。指定管理者制度による、館の運営、管理にかかる「公募」問題。来年まで休みなし。水平線の入道雲の影から声が聞こえて来た。「焦りなや。時は自然に満ちてくらあよ」。龍馬の声に聞こえた。　（モ）

館だより“飛　騰”第63号（年4回発行）　表紙題字：書家 沢田 明子 氏
発行日　2007（平成19）年10月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください
開館時間　9:00～17:00　年中無休
入館料　一般400円・高校生以下無料（7月28日～来年3月28日／500円・企画展のため）
館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください